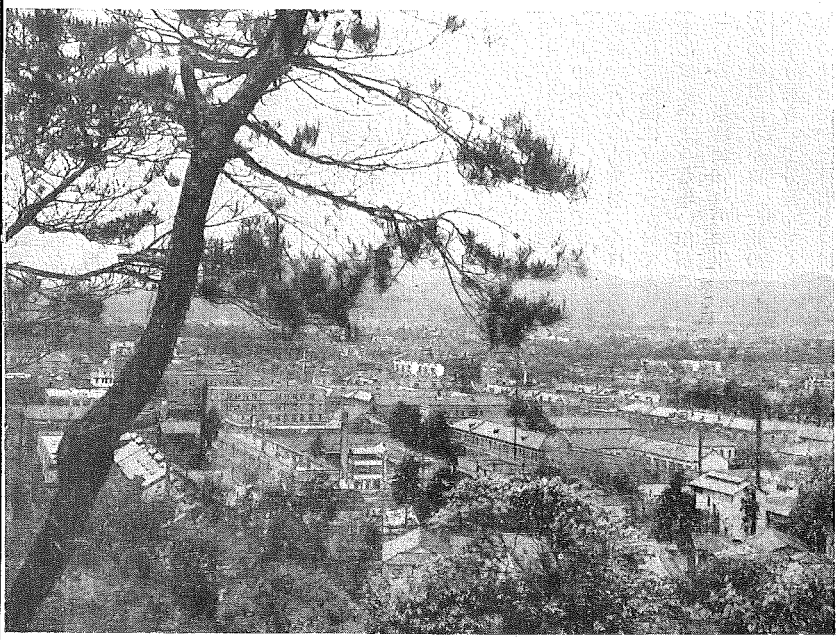


洛友會々報

京都市東山区吉田
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛 友 会

電気、電子工学教室の鳥瞰図

松の樹の枝の右下が、なつかしい教室の現在の姿であります。非常に手狭なために教室の左側、工学研究所の右側（写真で）に三階建が増築されるようであります。



アーノルドの思い出

昭二 柴田 福夫
(川崎重工工業株式会社
造船工場電装設計課)

「短期観察者は長期観察者が為し得る広く深い観察を行ない得ないかも知れぬが、重要な「直観」と云う点で前者が後者に勝る観察乃至洞察を行ない得る場合がある」之は量子力学の不確定性理論を修正した柴田理論の「S」である。

フランスのバリ、ポルトガルのリスボン、スイスジュネーブを経てハンプルグ飛行場へのりこんだ極東よりのめがねとカメラのヴァガボンドはこう考え乍ら、これからのドイツとスエーデンの一週間余りの短期工場見学に就て考えたのである。今年の三月から四月にわたって四十日余り欧州での技術打合せを終えた筆者は其の帰途、ドイツのハンプルグやハノーバー等へ行く機会を得た。「アンブルーン、フォールデムトーレ……」十七八年も前、高等学校時代、田圃の間を遠く続いた田舎道を歩き乍ら幾度びか口づさんだ思ひ出の歌、そのリンデンバウムを眼のあたり眺めることが出来たのであつた。理乙の学業で特にドイツ人からあのはきはきしたドイツ語話を習い、わからぬままにプアウストを読み、ヘーゲルを語り、ローレライを歌い、ヘッセに酔つた青春の若き日自然ドイツに親しえを感じさせられて来た私の頭には、別に何と云うことなしに常に一度はドイツへ行つて

見たいと考えていたが、遂に十数年の望みは達せられたわけである。そしてぞろろ高等学校時代への回想に耽つたのである。其のドイツのある電気機器メーカーで私達船舶電気屋に關係ある中型交流発電機の製造がすべて最近流行の自励式となつてしまつて知るのを知つたのであるが、話しは之からあつた苦しかった大学時代へとさかのぼるのである。

私達が所謂敗戦の大詔と云う奴を聞いたのはあの電気教室の中央実験室に於てである。そして其の昭和二十年八月十五日より私達は心身共に疲労した敗残の大学生となつたのである。神戸の空襲で家を焼かれ、本を焼かれ、ノートを焼かれ、着のみ着のまま逃げた私達一家はこれも亦灰燼と化した西宮の祖父の家の焼け残つた土蔵の中で、祖父を中心に私の母、叔父、海機より帰つて来た弟を合せて寝、あの配給の豆や南京それに焼け残つた米を、やけあとの家の庭の露天の星空で食事し、身体の無事を唯一の喜びとしたものである。其の後私達一家は私の通学のために京都府の園部の親戚へ世話になり又弟も三高へ入学したので、苦心して京都市内に家を求めて入つた。当時は米の買出しをしなければならなかつたが、大抵母と弟が行つてくれた。然し時には私も米やいもをり

エックサククに背負つたものである親しかった級友の吉山君と私達三人が三重県の笠戸迄いもを買いに行つた時、経済警察を警戒して一駅間の距離、八貫目のいもをかついで歩き京都の家へ帰つたのが夜の十二時半頃になつてしまつた事など今から思えば楽しい思い出である。其の頃忘れもしない昭和二十一年二月一日のあのモトラリアムである。働き手の手全くなく遺産のみで生活して来た我家は之には全く困つてしまつた。所帯主三百円、他は一人百円づつ、それ以外はすべて才一及才二封鎖、之では米一しよう百五十円で三しようしか買えない。食ひ盛りの我々には正に死の宣告の如き時代であつた。モトラリアム後、やむなく遺産の証券など売つて生活したが、株を売るなど云うことを知つたのは其の当時の事なのである。林重憲先生に御世話になつて宮木電機へ実習のような事をさせてもらったのも当時の思い出である。其の当此時の「アーノルド」の交流理論と云う原書を手に入れたのである。之はモトラリアム以前であつたか、以後であつたか忘れてしまつたけれども、とにかくその苦しい時代であつた。京都の河原町の丸善の二階に古書部があつて、相当数の古書が集められていた。其の中には時々目ぼしい図書が発見された。之等の図書はあの苦しかった時代、ダイヤとかカメラとかを米に代えた時代であつたから、恐らく大部分の古書の持ち主はそんなに苦痛とも考えずに売りに出したのかも知

れないが、中にはつらい思いで此の
依頼をした人もあったに違いない。
其の中に私はあのぼう大な六冊より
成る交流理論と直流才一卷を見出し
たのである。其の正確な価格は忘れ
てしまったけれども、米価の六しよ
うか七しよ位だったように思う。
勿論当時の価格から云えば一般的に
は此のアーノルドよりも米六しよ
の方が遙かに値打のあったに違
ない。当時学生だった私は此の本に
魅せられてしまったけれども到底手
が出なかつた。私は此の本が売れた
かどうかをみる為に丸善へ七八回行
つたが、仲々売れるものではなかつ
た。そして其の後血の出る思いで決
心して此の本を買つたのである。

私の持つている古典書、今ほこり
にまみれて本棚に立てらせてある
此の本には此のような思い出がこめ
られてゐる。当時物知りの学生だつ
た級友の林君が買った此の本を
見て、半分驚き、半分喜んでくれた
が、あの快活だった林君も今は永遠
に不帰の客となつてしまつた。

ここで今年の四月ドイツで眼のあた
り見て来たあの自動式交流発電機群
の話にもどるが、最新流行と見ら
れる此のような発電機に就ても実は
此のアーノルドには詳細に其の理論
が二十五頁程にわたつて述べられて
いる。そしてそれは大体今から五十
年又は六十年も以前に発表された理
論をまとめてあるのであつて、此の
方面の研究者もどうやら御存知ない
ようであるから「一度御読みになれ
ば如何にアーノルドさんがえらかつ

たかと云うことが判る」ので推奨し
たい。其の他勿論の事乍ら、短絡選
断や過渡現象や終戦後流行した電気
ポイラーの設計にすら私は此の本に
書かれてゐる方式をアプライした事
がある。最近出版されてゐる強電関
係の内外の図書も実は此の本に依る
点が多い。思えば貴重な図書であ
る。

黒い皮の表紙でカバーされた交流
理論、好ましいドイツ語で書かれた
大巻六冊、此のアーノルドの本の中
に一つ一つ大きい朱印が押されてあ
る。始め私は気にもかけてなかつた
が、実は最近それが私よりも二十年
も先輩の京大電気科卒業の方である
ことを洛友会誌を見て知つたのであ
る。而も此の方が御健在で御活躍さ
れ、洛友会誌に写真迄のつたことを
知り誠に嬉しく思つたのである。多
分長い間持つて居られて売られた其
の当時、何とも言えない氣持だつた
ろうと想像する。勿論賀茂真淵が本
居宣長に教えたように古典ばかりに
力を入れることは感心した事ではな
いけれども、此の本には実用書と骨
とう品の価値と兼備してゐるよう
に思ふのである。然し我が親愛なる二
十年前の先輩の方よ。他の学校の者
にあらず、此の勉強家の後輩が幸い
にも手に入れて今も尙時に机上に持
ち来たり、ほこりをはらつてゐると
云うことを知られれば、此の大先輩
は恐らく喜んで居られるに想違な
らう。此の拙文を読まれ、ひそかに
微笑んで頂けるものと思ふ。

アーノルドと云う
古典書をめぐ

つて私にとつては此のような思出が
ごもつて居り、此の本を見る度に

加藤副会長を悼む

山村 忠行

四月二十一日大阪工業大学学園祭の際
に友人総代として捧げました吊詞をも
つて追悼の詞とします。

謹んで大阪工業大学々々加藤信義
君に最後の別れを申し上げます。

思えば、本年三月中旬突然入院せ
られ、ひそかにひたすら療養につと
められた君が、ついに忽焉として長
逝されましたことは、余りにも大き
い驚きであり、今ここに幽明境を異
にして、再び君のお姿に接すること
のできなくなりましたことは、誠に
悲しみの極み、切々として痛惜の情
堪え難きものを覚えるのでありま
す。

君は、大正七年、学窓を出らるる
や、直ちに京都大学工学部電気工学
教室に職を奉ぜられ、四十年余にわ
たる教育家としての才一步を踏み出
されたのであります。

この間、大正六、七年卒業生は信
友会を組織し、互に連絡を保ち、親
密の度を一層深めて来たのでありま
すが、君は忙はしい中にもその会合
には一回も欠席されたことはないの
であります。昨年五月中旬、卒業四
十周年を記念して家族同伴にて四日
間に亘り会合を催しました際には、
令夫人を伴い出席され、明朗瀟灑な

あの苦しかった大学時代を築しげに
思い出すのである。

才八回洛友会総会記録

四月二十六日正午より南禅寺畔野
村別荘にて才八回洛友会総会を開催
した。

先づ鳥養会長議長席につき、開会
の挨拶があつて議事に入り、山村幹
事より昭和三十三年度事務並に会計
報告(別項)があり、次いで昭和三十
四年年度收支予算(別項)を満場拍
手裡に可決した。

前日まで気づかわれた天候も、今
日ばかりは洛友会晴れで誠に好天気
に恵まれ、東山を望見する風光明媚
の地に位し、天然美を利用して作庭
されたわが国代表的な庭園に、赤い
毛氈を敷いた床机に腰を掛け、お好
みの料理をとり、浅酌低唱心ゆくば
かりの興趣を湧かした。

散会午後四時。

総会出席者

- 鳥養利三郎 山岡 景範
- 小田島修三
- 四 岡本 越
- 六 上林 一雄 辻 忠夫
- 保寿 康象 松田長三郎
- 山村 忠行
- 七◎工藤 寿男◎乙葉 真一
- 山西 清信 阿部 清
- 八 高見 祥平
- 九 弘田亀之助 林 堅太郎
- 一〇 樋口 貞三
- 一二 幸前 治一 羽村二喜男
- 今田 英作
- 小宮 義和 田中 卓次
- 大島 広定

お願い

○昭和三十四年度会費は会報に挿ん
であります振替用紙にてお忘れなく
お払い込み下さい。
○なお名簿編果用のはがきが挿んで
ありますから、勤務先又は現住所の
変更は勿論、町名変更、電話番号変
更等も にお知らせ下さい。

東京タワー見学の記

会員松尾三郎氏(昭三三卒)の御好意で、五月二十一日の朝、七時五十分に会員二十六名集合して、東京タワーの見学会が開催されました。この電波塔は、地上三三三米という、世界一の自立鉄塔で、鋼材四〇〇〇屯を使用し、僅か一箇年半の短日月で完成されました。全国の各地からの観覧客が多数で、去る三月は一日に三三、〇〇〇名に達したそうです。一般の観覧者は地上一二〇米の展望台までしか登りませんが私共は松尾氏の特別の取計らいで、地上二二五米の作業台まで登れまして眺望をほいほいままにしました。朝もやのため富士山や太平洋までの遠望は利きませんでした。が、東京都内の鳥かん図は、美しい新緑に映えて、格別のものでした。高空から見た東京は、エッフェル塔下のパリや、摩天楼から見たニューヨークと何等遜色が無いものと感じました。終って参会者一同、朝食を共にして、松尾氏の好意に感謝しながら散会しました。

東京支部読書会報告

昭和三十三年度の読書会事業は次の通りです。一、昭三三、五、二六 参加者 二七名

テレビ放送技術について

清 水 威 寛氏 二、昭三三、六、二三 参加者 一六名 磁気材料について 服 部 周 三氏 三、昭三三、一、一七 参加者 二一名 原子力発電について 吉 岡 俊 男氏

以上三氏にお願いいたしました。が、年間予算も余るといふ甚だ不活潑な結果となり申訳なく考えております。対策案案をどしどし会員諸兄より承りたく存じます。(山村龍男)

東京支部麻雀会の記

東京支部の麻雀会は毎年二回行っています。が、昭和三十三年度の結果を報告します。尚、会員諸賢で今後参加を希望される方は幹事迄お申出下されば次回から御連絡します。現在六十名位同好の士がいます。ささやかですが賞品もありますから奮って御参加下さい。

一、前期の部

関西電力和田先輩の御好意により七月二十七日五反田清風荘で行いました。戦跡は別記の通りで一等は山口先輩、二等は吉岡先輩、ラストは林先輩でした。 サイドラインが各回の組合せを示しています。

1 2 計

- 山口(大一一) 三〇 一五 三〇五 老田(昭二〇) △三三 △三五 △三五 西山(昭八) △三三 △三五

二、後期の部

後期は年度末ぎりぎりの三月二十八日東洋電機の浅井先輩にお願いしまして、やはり五反田桔梗寮で行いましたが、会するもの九名でした。更に多くの方の御出席を希望致します。結果は次の通りで接待役或いは幹事が一、二等をとりまして「御苦労で賞」になってしまいました。(昭二〇 老田記)

- 1 2 計 太田(昭二四) △三七 △三五 △三五 杉山(昭二六) 三三 △三 一五 老田(昭二〇) △三三 三三 一六 細田(昭二三) 三三 七 〇 林(昭二〇) △三三 △三三 △三七 西山(昭八) 三三 △三九 三 木村(昭一九) 三三 三三 二二 村上(昭一四) △三三 一〇 △三三 浅井(昭七) 三三 三三 三三

ゴルフの集い

東京支部では、六月三日東京東郊我孫子ゴルフ場で、洛友会杯の争奪戦を演じました。

午前九時半スタート、二七ホールズメタルプレーの結果、オ三回洛友会杯は三菱電機の太田英雄氏の獲得するところとなりました。オ二位は我孫子メンバーの池田憲氏、オ三

位は松本久長氏、オ四位は土方鹿之助氏、オ五位は石堂園雄氏と日頃の精進の程が偲ばれる結果となりました。

戦績は別記の通りで、ウインタグリン使用でハンデいの八掛でした。規約により太田氏がハンデい二四、池内氏が二〇、松本久氏が八と更新することにになりました。

なおゴルフ部幹事は交替することに決め、松本久長氏に代って石川辰雄氏、相木一男氏に代って太田英雄氏が勤めることになりましたのでお知らせします。

次回は九月下旬小金井カントリークラブを予定しています。(相木一男記)

順位	ネット	グロス	イン	アウト	ハンデイ
3	127.2	138	47	49	9
2	116.6	131	48	41	12
6	130	154	53	47	20
4	128.2	151	52	49	19
5	129	153	50	51	19
V.B	142	166	63	53	20
7	131.6	164	58	48	27
10	150.8	194	62	65	36
8	131.8	175	59	58	36
1	109	145	52	46	30

鶴友会だより

鳥養先生の御上京の機会をとらえ毎月十二日に開かれる鶴友会が、四月十二日は日曜日に当りますので、遠出して、小田急沿線の鶴巻温泉で開かれました。鳥養先生も同日の「こだま」で御参加になりました。春の一日を一同なごやかに過ごしました。

この写真は大内誠三さんが撮られそれを全部自分でやらないとすまぬという方のものです。

- 前列右より 大西夫人、巽夫人、乙葉夫人、山下夫人、巽 良知 オ二列右より乙葉真一、鳥養先生 滝口三雄、山村忠行 後列右より 間崎龍夫、大西冬蔵 高見祥平、長島正隆、山下行雄 大森 丙の各氏



随筆、クラス会記事等どしどしお送り下さい。